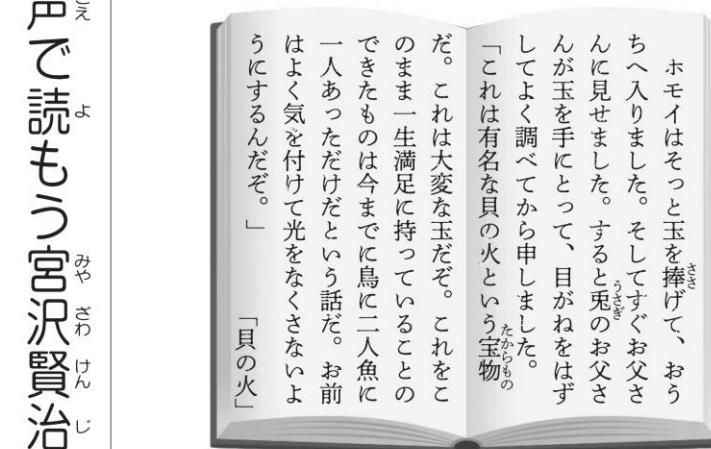




くらし・文化面の「家族で楽しもう」で紹介された宮沢賢治の本『貝の火』の一節です。

声で読もう 宮沢 賢治



ホモイという名前の子ウサギがある日、川でおぼれていたヒバリの子どもを助けました。その勇気をたたえられ、王



イラスト・一瀬美那子

2022年7月9日付
大分合同新聞7面

様から宝物の「貝の火」をもらいます。玉の中に赤い火が見えて、とてもきれいです。これからもよい行いをすれば、もっと美しくなるそうです。でも持ち主の心がけがよくないと、火は消えてしまいます。

貝の火を一生満足に持っていた動物はごくわずかだとお父さんは話し、「意地悪なんかしないように気を付けないといけないぞ」と注意します。よい心を持ち続けるのはむずかしいからです。

貝の火が新しい持ち主にわたったことは、たちまち知れわたりました。これまでとちがい、他の動物たちはホモイについてねいに話しかけ、言うことを聞きます。「みんな僕のでしたなんだ」といはるホモイ。え、それでいいの?

ちょっと心配ですが、物語は後半に続きます。

① お話の主人公の名前、動物の種類は何ですか。

主人公の名前（　　） 動物の種類（　　）

②主人公はなぜ宝物をもらいましたか。

③宝物とは何ですか。またどんな様子ですか。その宝物を一生持っていた動物と数は？

④あなたなら、お話の続きをどう書きますか。